



JA新しいわたの自己改革

もっと知ろう、JAの取り組み

JA新しいわたの「農家所得の増大」や「農業生産の拡大と経営基盤の安定」に向けた取り組みを紹介。今月は「育苗ハウスの有効活用」を紹介します。

育苗ハウスの新たな活用技術

JA全農式トロ箱養液栽培システム

「ういずOne」



ういずOneで栽培した
ミニトマト



■開発の目的

「ういずOne」は、「水稻育苗ハウスや遊休ハウスなど有効活用」しながら、「栽培管理が容易」で、なおかつ「安価な栽培システム」をつくることを目的にJA全農が開発しました。



■システムの概要

発泡スチロール箱の栽培槽を用いた隔離床養液栽培で、他の養液栽培システムと比較して設置・移動が容易で導入コストが安価なシステムです。

- ①設置場所を選ばない
- ②規模面積も自由
- ③技術仕様は単純
- ④自主施行でコスト抑制可能

等の特長があります。



■特徴

1. 隔離床栽培のため土耕や土作りが不要。根域制限による液肥中心の草勢管理のため、難しい肥培管理が容易になる。
2. 液肥混入機以外の部分は、自主施行が可能で、電気工事も不要のため導入コストが大幅に低下する。
3. 発泡スチロール栽培槽は自由に設置と撤去できるため、遊休ハウスの有効活用や連作障害で栽培が難しい場所でも栽培できる。
4. 発泡スチロール栽培槽のため、断熱・保温性が高く根域環境に優れる。



担当者の声



営農経済部県北園芸センター 指導員 みなみくろさわ なおと
南黒沢 直人さん

J A管内では、水稻育苗ハウスを有効活用するため、現在3つの営農組織で導入し、ミニトマトの栽培に取り組んでいます。発泡スチロール箱を利用して栽培するため、土耕することがなく、水稻プール育苗ハウスの夏場の利用が可能になります。水稻や土地利用型作物主体の営農組合での、夏場の所得確保や長期の雇用対策にもつながり、おすすめしています。

詳しくは、お近くの営農経済センターまでお問い合わせください。